



# 東海道石部宿～おかげまいりとええじゃないか～

草津市教育委員会文化財保護課

専門員 八 杉 淳

## 京立ち石部泊り

石部宿は、「京立ち石部泊り」といわれ、距離にして6里（約36km）で、京都を出た旅人が最初に草鞋わらじを脱ぐ宿場でした。

その石部が宿駅として登場してくるのは、豊臣秀吉の時代といわれていますが、秀吉は慶長2年（1597）信濃国善光寺ぶつがんを京都方広寺（京都市東山区）の大仏殿に移すに際して、沿道の宿駅に500人・236疋の人馬の徴発を課しています。これを国家的事業として位置づけており、近江では伊勢亀山から土山までを岡本下野守しもつけのかみと羽柴下総守しもうさのかみ、土山から石部までを長束正家ながつかまさいえ、石部から草津までを新庄東玉しんじょうとうぎよく、栗太郡は駒井中務少輔こまいなかつかさしょうふ、そして大津から京都までを京極高次に担当させました。このときの佛龕移送にともなう継立の場として石部の名がみえており、宿駅としての機能

がある程度備わっていたと考えられます。

そして、石部宿が近世的な宿駅として整備されるのは、関ヶ原の合戦に勝利を収めた徳川家康が、その翌年の慶長6年（1601）におこなった東海道整備に至つてのことです。このとき宿駅に定めたところには「伝馬定書」てんまさだめかきが下され、常置人馬じしめんじまの設置とともに地子免除が申し渡されています。残念ながら石部宿には、宿駅として定められたという伝馬定が残っていませんが、慶長6年に水口宿に下された「伝馬定書」（甲賀市水口歴史民俗資料館蔵）があり、そのなかに上りの継立先として石部の名前がみえていることから、この年に石部が宿駅に定められたことがうかがえます。慶長6年に36人・36疋であった常置人馬が、のちに100人・100疋となって、江戸時代における東海道交通の役割を担ってきました。



『伊勢参宮名所図会』（草津宿街道交流館蔵）に描かれた石部宿

石部宿の規模については、宿高1,719石余り、町の長さが15町3間で、人口1,606人、家数448軒を数えました（天保14年『東海道宿村大概帳』）。そして、休泊施設として本陣が三大寺本陣と小島本陣の2軒、旅籠屋はたごは32軒で、本陣を補完するための脇本陣は設けられていませんでした。

石部宿は、寛政9年（1797）に出版され

あきさとりとう いせさんぐうめいしよずかん  
た秋里籬島編の『伊勢参宮名所図会』に、そのすがたが俯瞰して描かれています。

## 石部宿の往来

石部宿では、東海道という東西交通の主要な街道の宿駅であったことから、多くの通行がみられました。参勤交代をはじめ、幕府の公用の通行では、京都所司代や大坂城代、大番頭、京都町奉行や大坂町奉行など、本陣に残る「宿帳」に記されています（湖南省教育委員会所蔵）。ちなみに、その公用の通行は、幕末期に世情が慌しくなるとこの時期は、尊攘派の往来や官軍の通行や参勤交代の制度が緩和されたことで、江戸にいた妻子が帰国するなど、通行数は増加し、例えば元治元年（1864）に小島宿本陣で休泊した公用の通行は51件を数えています（『新修石部町史』通史編）。ちなみに享和年間には14件程度、天保・弘化年間には17件程度の参勤の通行も含め、公用通行がありました。

幕末には、寛永11年（1634）の三代将軍家光以来途絶えていた将軍上洛が、230年ぶりに14代将軍家茂によっておこなわれました。このときの通行は、幕府の威信をかけて盛大におこなわれ、石部宿では小島本陣での小休みとなりましたが、その準備は大そうなものであったと記録に記されています。

このように、本陣を利用する休泊者については、その数をうかがうことができます。これ以外の旅籠屋で休泊する一般の旅人の数は知ることができませんが、後に触れるおかげまいりなどは特殊な事例としても、伊勢参りなど信仰を求めた旅人の往来は相当数にのぼったと考えられます。

## おかげまいりと石部宿

東海道は伊勢参詣の道筋でもありました。石部の隣宿である草津宿の東海道と中山道の分岐に建つ追分道標には「左 中仙道みのち」「右 東海道いせみち」と刻まれているよう

に、西の旅人は伊勢への道筋として東海道を通っていきました。

伊勢参詣は、江戸時代に伊勢の御師おしという人々によって各地に広まり、村々の人たちは伊勢へ旅に出かけました。その伊勢への旅で、60年に一度の周期で狂騒的に訪れたブームがあります。

おかげでさ すりりとさ 抜けたとさ

これは、道中唄で60年に一度訪れる伊勢参宮のブームを唄ったものです。

おかげまいりとは、領主や主人の許しを得ない抜けまいりに端を発したもので、短期間に大勢が伊勢へと参詣する現象です。各地の老若男女が、旅支度もせずに着のみ着のまま大挙して旅立ち、街道筋の宿場や村々では、それらの人々に対して金米を施し旅を手助けしました。

江戸時代に起こったおかげまいりの群参は、慶安3年（1650）、宝永2年（1705）、明和8年（1771）、および文政13年（1830）が知られています。

慶安3年のおかげまいりは、江戸の商人たちにはじまり、白衣装の旅人たちは伊勢へと向かいました。このとき、箱根の関所を通った人々は1日2,500人にもものぼると記されています（『寛明日記』）。また、宝永2年には、もとおりのぶなが たまがつ ま  
本居宣長の『玉勝間』に4月9日からの5日間に362万人が伊勢へと向かったことが記さ



歌川広重画「東海道 五十二 石部」  
草津宿街道交流館蔵（中神コレクション）

れています。

これら2回のおかげまいるの記録は、石部宿では確認できていませんが、明和8年の群参について、石部宿の「宿帳」（湖南省石部歴史民俗資料館蔵）には、4月8日からおかげまいるの一行が通りはじめ、まず丹波田辺（京都府舞鶴市）の者、そして和泉（大阪府）、山城（京都府）、摂津（大阪府・兵庫県）、若狭（福井県）、さらに近江の人々がおびたらしい数で通っていったと記されています。これ以外に記載がないので、このときの石部宿のおかげまいるの群参のようすはうかがうことができませんが、恐らく記録にとどめるくらいのことですから、相当な数の人々が伊勢へと向かっていったのでしょう。

つぎの文政13年のおかげまいるについては、同じく「宿帳」に少し記録があります。

文政13年のおかげまいるは、それまで幾度かのおかげまいるに増して、人々の熱狂が頂点に達したものでした。阿波（徳島県）の寺子屋の子供たちの抜け参りに端を発し、西国を中心に一気に広がっていきました。『御蔭参宮文政神異記』によると、3月晦日みそかから閏3月29日うるうづいたちまでに228万1200人、4月朔日から晦日までに144万400人、5月晦日から29日に34万2400人、そして6月朔日から20日までに21万2800人が伊勢へ詣でたことがうかがえます。このときのおかげまいるは、それまでとは異なり、派手な装束に身を包んで伊勢音頭を唄いながらの道中だったようです。歌川広重の描く浮世絵「東海道五十三次 石部」（有田屋版）にも、おかげまいるときの風景ではありませんが、石部宿と草津宿の間にある立場・目川田楽を売る茶店とその前を踊りながら行く伊勢参りの一行が描かれています。

さて石部宿では、文政13年、20人から30人ほどの一行が、杓1本と莫蔭1枚を持ってつぎつぎと通っていきました。『伊勢御蔭参実録鏡』には、あちこちの小道に至るまで、

人々が「雲霞うんかのごとく、蜘蛛くもの子を散せしごとく、きやり歌を歌うやら、流行歌を歌うやら、抜け参り親はやしを致すやら、えいやえいやのかけ声」を賑やかに唱えながら、あたり一面が人の山であったと記しています。3月になると、石部宿にも阿波からのおかげまいるの一行の姿が目立つようになり、その後は播磨（兵庫県）、丹波（京都府・兵庫県）、大坂、京都や九州からの参詣者が通っていきました。石部宿では、いよいよおかげまいるがはじまったと噂をする間もなく、一日何千、何万の旅人がやってきました。石部宿でも、彼らに飯や湯の施行をはじめました。夕刻には旅籠屋はもちろん、商家や一般の民家も一軒残らず施行宿となって、それでも収容できないので、縄手や町々の番所で寝泊りする者もいたと、石部宿の「宿帳」は記しています。また、京都二条城在番を勤めた渡部与右衛門は、彼の手紙に、道中の混雑ぶりは江戸の浅草市いほどの人出で、大きな旅籠屋では200人から300人もの旅人を泊めており、宿泊客は、布団も枕も借りず、腕枕で休む光景も見られたと記しています。

このときの通行者数を隣の水口町奉行所が調べたところ、通行者は1日2万人程度であったとしていますし、一説によると畿内の人々は、伊勢へ近いこともあって、8割近くの人々



文政13年おかげまいるの記事  
「石部宿本陣宿帳」（湖南省教育委員会所蔵・  
甲賀市市史編さん室写真提供）

がおかげまいりに加わったとされています。

一方では、このおかげまいりの群参に乗じて、石部宿では宿泊料などの高値を抑制することや、幼年の者ばかりの旅には手助けする旨が触れられています。また、往来する多くの旅人のなかには、病気になるものもいて、たとえばおかげまいりの途中に播磨国の百姓が病気で倒れたことなども記録に残されています（「膳所藩記録」）。

江戸の時代が終わり、明治になって23年。この年もおかげまいりの年でした。江戸時代ほどの規模ではありませんでしたが、多くの人々が伊勢へと向かいました。しかし、江戸時代のように施行を求めて旅に出たとしても、「せち辛い世の中に、さうはまいらず」と『東京朝日新聞』の記事に報じられているように、江戸時代のように、沿道の人々の施行を受けて伊勢まで辿りつくことは並大抵ではなかったようです。この明治23年のおかげまいりを最後に、このあとは鉄道での伊勢参宮へと変わっていきます。明治22年に開業した関西鉄道（現JR草津線）は、草津で東海道線と分かれ、伊勢へ向かう鉄道ルートとして利用されましたが、江戸時代の街道交通のように、石部宿をはじめ宿場で休泊することもなく、伊勢へ参詣できるようになりました。

### ええじゃないかの御札降り

慶応3年（1867）の秋、江戸から西の地域では「ええじゃないか」の囃子にあわせた熱狂的な踊りが流行しました。「ええじゃないか」は世直しを熱望する大衆運動の様相を呈し、伊勢神宮をはじめ諸国の神々の御札降りなどを契機として、世直しを神意と受けとめ、伊勢への道筋であった東海道の宿場町などにみられました。

近江では、草津宿で、渋川屋へ春日神社の御札が、山源の家には天照大神の御札が慶応3年10月29日から降りをはじめたといえます（「よろつにわかにも日記」『草津市史』

所収史料）。また、ここ石部宿でも10月29日になって御札降りがみられたと記されています。同日の朝、平松屋に御札降りがあったと記録に見えますが、これは伝聞によるもので、実際は11月19日のことでした。この日の卯の刻（午前6時ごろ）、石部宿谷町の福島仲次家へ天照大神の御札が降ったことが「降神諸事控」という資料に記されています。降下があった福島家では、19日から21日までの3日間、神祭りを行い、訪れた人々に酒飯を振るまい、その入用は酒1石、米1俵、雑用15両に達したといわれています。御札降り聞いた近隣の家々からは、酒や餅など多くのお供え物が届けられ、神祭りが終わると、餅の鏡開きがあつて宿内の谷町、仲町、出水町、大亀町の各戸へと配られました。

そして、伊勢大神宮の「御天降」は、吉例であるということで、福島家に御札が降ったという噂を聞いた人々は「ええじゃないか」の乱舞となって、福島家へと踊りこんでいったといえます。これらは、人々の時代の変革に対する思いを、伊勢神宮という神への期待に置き換えたものでしょう。

東海道51番目の宿場町であった石部宿。江戸時代を通じて多くの往来がみられました。参勤大名や、幕府公用の通行、さらには一般の旅人の通行など、その目的もさまざまでした。なかでも、おかげまいりは、施行による旅であったため、経済的な効果は別としても、多くの人々が伊勢へと詣でて行くわけですから、石部宿でも多くの情報が行き交い、宿の繁栄にも少なからずつながっていったと考えられます。

#### 滋賀文化財教室シリーズ No.222号

発行年月日 2007年3月9日  
編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会  
〒520-2122 大津市瀬田南大萱町1732-2  
TEL(077)548-9780 FAX(077)543-1525